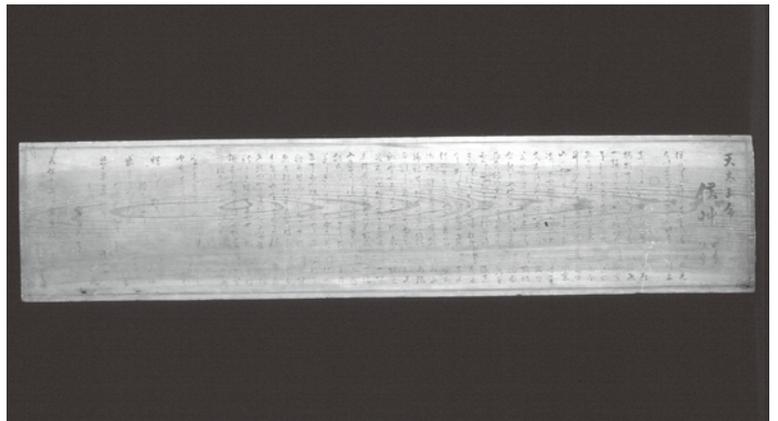


# 俳句

## 山武市指定文化財（歴史資料） 柴原安房神社句額（柴原）

天保十三年（一八四二）に柴原村を中心とした松ケ谷、横地、早船、田越など約十五の村の俳句愛好者が、杉の一枚板（四一センチ×一メートル九十七センチ）に四十句を寄せ、安房神社に奉納したものです。また、天保十一年に建立された勝覚寺の芭蕉句碑の建立にも参加した人々も多く、当時の俳句人気がかがいがい知れます。



柴原安房神社句額

ドラえもんの道具

佐倉市(市内在勤) 稗田 寿明

あたまからひよこ饅頭食ぶのどか  
朝寝して朝寝坊ではないと言ふ  
ドラえもんの道具のやうな茅の輪かな  
向日葵の迷路を走る子は風に  
大の字で眠る金曜日之夜長  
出張の視察先なる紅葉山  
大根を水の重さと思ひけり

カンナ花

小松 齊藤 利治

鼻先に金木犀きんもくせいの名乗りかな  
花の径見知らぬ人に貰ふ声  
声上げて子等を走らす花の径  
妹が兄の仇へカンナ花  
鏡成す農夫が一念代田かな  
正門の信号青き夏休  
簪かんざしへ髪かみの記憶や梅香る

ふるさと

湯坂 佐久間敬子

山桜主待つてる子らの声も  
山里の柿の葉赤く子ら笑顔  
ふるさとの山河梅花今想う  
奥庭の赤白の花寒椿  
アサヲさん背負い籠背負い梅畑  
日溜まりに一二顔出す路の臺  
寄せ植えの赤白黄色春近し

月下美人

東金市(元市内在勤) 白井 汎

紫陽花や青水無月小さき雨  
濡し衣の傘持たぬ呵呵大笑  
船方の荒ぶる声や入梅鱒  
自転車のかち定まらづ若葉風  
梅雨晴やペダルの軋むをとこ坂  
天窓をそつと抜け夏雲に乗る  
「やつさーやつさ」とんと跳ねたり祭の子

## 潮騒の子守歌

下之郷 平澤千恵子

仏壇にあふるる香氣よもぎ餅  
凍る空風の占めたる力かな  
愛犬が小走りになる雪しぐれ  
洋上うねり大きく嵐かな  
春の雷山を覚めらせ風光る  
初場所互いの心念じたる  
山清し時鳥かな夢を呼ぶ

## 初詣

大堤 藤代百合子

初詣とんとこ飴に浮かれをり  
遠き日の匂ひとおもふ春田かな  
空牛舎花菜の波に隠れけり  
卒業生帰宅の歩幅大きかり  
ハイタツチしたる球児や汗の顔  
運動会綱引く足の揃ひたる  
旧き友見送る肩に一葉落つ

## 万緑

蓮沼 石橋ゆり子

喜寿の席クラス会かね山紅葉  
雨音の屋根駆けてゆく秋深し  
土筆ん坊孫の背丈の伸び早し  
手料理は菜の花の香おひたしに  
道の駅地産地消の春野菜  
卯の花や息を整え歌始む  
万緑や空と海へとはにわ道

## 梅雨

森 石橋八重子

マイナンバーカード更新梅雨の入り  
仄暗い部屋に灯すや走り梅雨  
梅雨晴となりたる午後を存分に  
久々に子の宅巡り梅雨の旅  
早梅雨苔がひび割れ板を為す  
梅雨明けのまばゆい日差し心して  
裏山に見ゆるか細き夏蕨

青田風

木原 伊藤みや子

初日の出乗馬さくさく九十九里  
銀翼は空のブローチ初御空  
何気なく曾孫の歩行器初買いに  
老犬の様子見廻る春の雷  
青田風流れに乗りし特急車  
万緑や九十余歳の鋏軽し  
外出の夏着あれこれ老婆心

祈り

森 遠藤三千代

我が庭の黒竹の花百二十年  
亡弟の三社祭の勇姿かな  
くちなしの香につつまれて目覚めけり  
七夕や願い書く手の墨のあと  
一針の母の思いの浴衣かな  
快復を願い祈るや望の月  
春迎へ逝きし先人声やさし

無能なる

東金市(山武俳句会)

木村 一夫

無能なる鬚を播るやら寒の朝  
春陰やジェルソミーナを口ずさむ  
娘のはたく吾のつら可笑し山笑ふ  
至福とふ熟柿を鴉突きにけり  
女郎花月なき星の虚笑ひ  
春雨やてんでに散りぬ琉王輪花  
小首ふる手風琴の音つくも春

日向ぼこ

横芝光町(山武俳句会)

向後 寛

ガラス越し庭を眺めて日向ぼこ  
春立つや鬼の子もゐる成田山  
若竹の葉ずれ誘ふや熊谷草  
川風や河津桜の珊瑚色  
ウクライナ戦塵己まず麦の秋  
聖五月ローマ教皇コンクラーベ  
老いらくの恋を語るや生御魂

## 夏

木原 鈴木とし子

昔から木綿に限る夏シャツは  
手に持ちし線香花火ポトリ落つ  
毎日を素足で過ごす心地よさ  
浴衣着て見よう見まねの踊りかな  
威勢よきねじり鉢巻祭太鼓  
昼食は氷菓で済ます八十路かな  
扇風機未だに使用捨てがたし

## バイモの花

森 黒木とも子

南アルプスの勇姿にここへる同窓会  
落花生かみしめ想う郷の母  
岩山に健気に藤の花かくれけり  
海濱の年毎あきぬ糧となり  
暑く猛け高校野球のドラマに泣く  
ふき刈りの誰にあぐるか迷いけり  
わが小庭思い入れたるバイモの花

## 酢橘

本須賀 今関 紫苑

いただきし抱える程の酢橘かな  
やわらかき小草つみおり春の土  
プランターよりパンジーの溢れ咲く  
丹精の西瓜つぎつぎ至福かな  
満を持し『二日月』とふ歌集かな  
たまさかに二日月見ゆ田圃道  
涼やかや杉の天井「さんむモール」

## 千の窓

日向台 立川目陽子

カーネーション子の連合ひが抱へ来て  
聖五月重湯に自づ口開く児  
父の日やノンアルの缶ぶつけあふ  
サンドレスの肩紐越ゆる蒙古斑  
女子会やデコポン配りおひらきに  
千の窓見おろす底に春の墓所  
戒名は旧漢字なり春の風

「祭」

本須賀 川島 隆

首タオル

八街市(さんぶの森吟行俳句会) 浅野 重子

門口の提灯ほのと宵祭

獅子頭ぬげば幼なき汗の顔

槇垣の路地を抜けゆく神輿かな

浜風や祭囃子の切れ切れに

遠く近く風に乗り来る祭笛

獅子頭しまひ息子の夏終る

白丁の干され祭の果てにけり

秘佛運ぶ

埴谷(さんぶの森吟行俳句会) 大掛 史子

陸自守る春夜の高速秘佛運ぶ

花の寺のみ佛五体瞋恚の眼

勅筆の心経の掌紋春闌ける

和三盆の甘さふふみて花行脚

浅間路の高原文庫春の雪

横綱も鳶重も一列福は内

薔薇分けて目指す文学館丘の上

四季を愛でる

横芝光町(さんぶの森吟行俳句会) 鵜澤 正信

ムキムキの仁王の筋や春埃

雛の間に独り言ひなごつ児やおままごと

抜手てふ古式泳法夏の海

赤とんぼ寂しき人の肩に来る

玻璃窓を隔つ鼻先小鳥来る

柚子が好き柚子湯の柚子に爪を立つ

袖とおす肩の軋みや冬に入る

## 美術館

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

崎谷 弘子

分け入って冒険好きの青蛙

緑の夜点眼薬のほろ苦し

法師蟬木陰に五つ泥団子

秋高し尖り屋根の美術館

風が好き夕日が好きよ秋桜

秋の燈や茶と二切れの羊羹と

小鳥来るプラットホームの日溜りに

## 「昭和」

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

神保ミツエ

初刷の百年の文字昭和かな

麦踏やうしろ手の吾子爺の真似

咲き初めしげんげつみつみ下校の子

卓袱台に宿題広げ夏休み

蝗捕り宿題となる上級生

田を返す牛に替わるや耕運機

終戦日妣の写真と映画館

## 六地藏

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

戸村真理子

珠洲焼の皿に色あり桜餅

塩を打ついなだ一尾や吾が釣果

語り部の時をゆるりと額の花

父母の郷は天竜曼殊沙華

秋燈や夫婦それぞれ黙の中

装蹄の順待つ馬や冬日和

六地藏拝み四温の七回忌

## 伊予訛

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

能瀬 五月

田芹摘む夕日と影を連れ帰る

花の雲雨後の青空使ひきる

なつかしぶ母の訛や梅筵

五月雨や暖簾くぐれば伊予訛

切株の年輪崩る梅雨菌

青空を川面に揺らし遊び船

体内に羅針盤ある帰燕かな

## 桜餅

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

本堂 良衣

干支菓子の一点の紅初茶湯

川風や桜餅屋の緋毛氈

朝な朝な加賀の棒茶を淹れて春

到来の山独活さらす夕支度

ピーマンを炙り一品料理かな

走り蕎麦せいろ二枚の運ばるる

母の里能登の匂ひの海鼠食む

## 四方の春

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

藤卷 佳子

真夜の床そこだけ明き鏡餅

みかんむくみなやはらかきかほになり

鐘の音を背に露座仏や春の風

四方の春見はるかすなりモノレール

富士の雪めぐりて滝のあやなせり

友送る帰路の蛸かしましき

空海の真蹟にあふ秋初め

## 若葉風

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

山田由紀子

花三分佐倉城址の空真青

若葉風里山丸くふくらめり

八重桜老幹岩と化す威厳

竹林を過る鳥影春の黙

黄蝶舞ふ城址の礎石平らかに

愚痴ひとつふたつ眩きしゃぼん玉

てにをはに迷ひ机上の蜘蛛逃がす